

2023年度 入学試験問題

国語

(帰国生入試)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

① 次の文章は、フランス生まれの美術家であるマルセル・デュシャンの「泉」という作品についてのもので、これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合で本文や写真などを省略したところがあります。

① デュシャンは確信的なやり方で、この問題作を世に出しました。

《泉》を発表した30歳当時、デュシャンはすでにアーティストとして一定の評価を得ており、ニューヨークのある展覧会の実行委員にもなっていました。それは6ドルの出品料さえ払えば、誰でも無審査で作品を展示できると謳う公募展でした。

デュシャンはそこに目をつけ、《泉》を出品することにしたのです。

ただし、デュシャンは実行委員だったので、偽名を使うことにしました。「委員の作品だ」という色眼鏡を通してではなく、公正な目で作品が判断されることを望んだからです。作品に「R.MUTT (R・マット)」というサインが書かれているのは、このようなハイケイがありました。

しかし、無審査の公募展だったにもかかわらず、結局この作品が展示されることはありませんでした。公募展の実行委員たちは、「これはただの便器だ。アートではない」と判断し、展覧会場に飾られるべきではないと考えたのです。

デュシャンは実行委員の1人だったわけですが、自分が「R・マット」であるということはひた隠しにしたまま、素知らぬ顔でほかの委員たちによるこの判断を見守っていました。

彼が行動に出たのは、そのあとのことです。

公募展が終わると、彼は突然、仲間とともに発行していたアート雑誌に《泉》の写真を掲載したので。展示されることがなかった《泉》は、この雑誌記事によってついに人々の目にさらされることになりました。

だから、みなさんが《泉》を見て、「え、これがアートなの!?!」と呆れるのは決しておかしい反応ではありません。むしろ、デュシャンはあえて議論を巻き起こそうとして、この作品を発表したのだと思います。

もしもこの《泉》が最初から「おお、すばらしい作品だ!」と受け入れられ、例の公募展にすんなりと展示されていたら、彼の狙いは大きくハズれていたことでしょう。

2018年、上野の東京国立博物館で、デュシャンの作品を中心とした企画展が開催されました。《泉》は展覧会のポスターにも使われ、目玉作品として扱われていました。

私はこの展覧会に行った際、人々がこの作品をどのように鑑賞するのかわかずに観察してみたことがあります。

《泉》は、腰の高さほどの白い台の上で、ガラスケースに覆われて展示されており、たくさん

の人がこの作品の前で足を止めていました。なかには、この作品の姿を目に焼きつけようとするかのように、腰をかがめて作品に顔を近づけている人もいます。ガラスケースをゆっくりと一周し、いろいろな角度から作品を観察している人もいました。

鑑賞者たちは、作品の形態・質感・表面のわずかな傷・サインなどをじっくりと見つめていました。

そんな鑑賞者たちの姿を観察しながら、私は考えました。

「もしもデュシャンがこの場に居合わせて、人々のこのような姿を見たら、どんなリアクションをしただろうか？」

美術館で真面目に鑑賞していた方々には悪いのですが……^②きつとデュシャンは鼻で笑っただろうと思うのです。実際、彼は《泉》についてこう語っています。

「最も愛好される可能性が低いものを選んだのだ。よほどの物好きでないかぎり、便器を好む人はいないだろう」

前述のとおり、《泉》に用いられた便器は、デュシャンがつくったものではなく、とくに珍しい造形のものでもありません。唯一^{ゆいいつ}、デュシャンが自ら手を動かした「サイン」ですら、黒いインクで雑に（それも、偽名が）書かれているだけです。

美術館で立派なガラスケースに入れられ、いかにも「どうぞ、よく鑑賞してください」といわんばかりに展示されていたものの、やはりそこにあるのは「ただの便器」だったのです。

「それでもやつぱり、有名なアーティストがたった1つの便器を選び出して、そこに直筆でサインをしたということに価値があるんじゃないですか？」

そう考える人もいるかもしれませんが。歴史的遺物に認められるような価値が、この便器にもあるのではないかということですね。しかし、残念ながらその可能性は低いといわざるを得ません。

※ 最初に見た《泉》の写真と、デュシャンが雑誌に掲載した写真とをよく見比べてみてください。なにか気づくことはありませんか？

そう、2つの便器は形状が違^{ちが}っているのです。よく見ると、サインの筆跡^{ひっせき}にも微妙^{びみょう}に違いがあるようです。

じつをいうと、上野の東京国立博物館で人々が見ていた《泉》は「レプリカ」で、アメリカのフィラデルフィア美術館が^cシヨゾウしているものです。

デュシャンが公募展に出品し、のちに雑誌で発表した「オリジナルの作品」は、展示されることのないまま失われてしまいました（おそらくゴミと間違えられて捨てられてしまったのです。う）。第1号の《泉》の現物を見たのは、公募展の委員ら、ごく一部の人たちだけなのです。

だとしても、なぜ^③オリジナルとレプリカで「違う便器」を使っているのでしょうか？ まったく同じ形のレプリカをつくることだっ^dてヨウイにできたはずです。

それには事情があります。

《泉》の発表からかなりの月日が経過した1950年、美術商だったジャンニスという男が、マ

ンハッタンにある自身のギャラリーで開催する展覧会に《泉》を展示したいと考えました。しかし、前述のとおりこの作品はすでに紛失してしまいました。

そこでジャンヌは驚くべき手段に打って出ます。彼はフリーマーケットで中古の便器を購入し、デュシャンに「この便器にサインをしてくれ」と頼んだのです。

なんとも失礼なこの依頼を受けたデュシャンは大激怒した……かというところ、まったくそんなことはありませんでした。彼はジャンヌの申し入れに対し、（おそらく）「オッケ〜」と快諾し、再び「R.MUTT 1917」とサインしたのです。

東京国立博物館で人々がまじまじと見ていたあの目玉作品、そして、みなさんにじっくりと「アウトプット鑑賞」をしていただいた《泉》は、デュシャンが選んだものですからありません。第三者である美術商の男がフリーマーケットで手に入れた「ただの中古便器」だったのです。

このような話を聞いてしまうと、呆れや腹立ちが蘇ってくるのではないのでしょうか？ やはりこの作品は、デュシャンの悪趣味なイタズラだったのでしょうか？

そんなことはありません。《泉》が「最も影響を与えた20世紀のアート作品」という評価を受けているのは、これが単なる悪ふざけではなく、彼なりの探究に基づいた「表現の花」であると考えられているからです。

では、デュシャンはこの奇妙な作品を通じて、いったいなにを表現したかったのでしょうか？ 「アートという植物」に沿って解説してみたいと思います。

すでにお話ししたとおり、ルネサンス絵画の世界では、「花」作品の美しさや精度などの出来栄が、すぐれた作品であるかどうかの決め手とされてきました。別の言葉でいえば、「視覚で愛でることができるかどうか」こそが、最も重要だったのです。だからこそ、目に映る世界を描き写す遠近法などが、大いにもてはやされました。

それに対し、20世紀のアートでは「探究の根」のほうにも目が向けられます。ここまで見てきたマティス、ピカソ、カンディンスキーらは、「表現の花」を生み出す過程で育まれる「探究の根」にこそアートの核心があると考えたのです。

しかし、彼らは同時に、作品である「表現の花」にも重きを置いていました。自分たちの探究の過程は、あくまでも「視覚で愛でることができる表現」に落とし込まれるべきだという前提がそこにはあったのです。

デュシャンが目をつけたのは、まさにそこでした。事実、《泉》からは「視覚で愛でられる要素」がことごとく排除されています。元が便器である以上、美しいとはいいがたいですし、見るのも触るのもイヤだという人もいるでしょう。

つまり、《泉》とは「表現の花」を極限まで縮小し、反対に「探究の根」を極大化した作品にほかならないのです。デュシャンはこの作品によって、アートを「視覚」の領域から「思考」の領域へと、完全に移行させたといってもいいでしょう。

かくして、マティス、ピカソ、カンディンスキーらが推し進めてきた「表現の花」から「探究

の根」への移行は、デュシャンがとうとう「最後のダメ押し」をする結果となったわけです。

デュシャンは「彼なりのもの見方」を通して、アートのあらゆる常識を疑ってかかりました。なかでも大きくひっかかっていたのが、「アートは美を追求するべきものなのか……？」という疑問だったでしょう。

デュシャンは、自分のなかに湧き上がったこの疑問を放置せず、「探究の根」を伸ばしました。

その結果、《泉》という「表現の花」を咲かせ、「X」ではなく「Y」で鑑賞するアートという「自分なりの答え」を生み出したのです。

すでにお伝えしたとおり、20世紀のアートの歴史は、^④それまでの「あたりまえ」からの解放の歴史です。

マティスは「目に映るとおりに描くこと」、ピカソは「遠近法によるリアルさの表現」、カンディンスキーは「具象物を描くこと」といった「常識」からアートを解き放ち、「自分なりの答え」を生み出してきました。

そして、デュシャンは《泉》によって、それまで誰も疑うことがなかった「アート作品＝目で見て美しいもの」というあまりにも根本的な常識を打ち破り、アートを「思考」の領域に移したのです。

(末永幸歩『13歳からのアート思考』より)

※最初に見た《泉》の写真……東京国立博物館に展示された《泉》を写したもの。

※「アウトプット鑑賞」……作品を見て、気がついたことや感じたことを声に出したり、紙に書き出したりすること。本文の「最初に見た《泉》の写真」についての鑑賞をさしている。

問1 ~~~~~線 a ~ d のカタカナを漢字で書きなさい。

問2 ——線①「デュシャンは確信犯的なやり方で、この問題作を世に出しました」とありますが、デュシャンがこの作品を出した理由を、筆者はどのように考えていますか。次の空らんに入れるのにふさわしいことばを九字でぬき出しなさい。

芸術とは何かということについて、

としたから。

問3 ——線②「きつとデュシャンは鼻で笑っただろうと思うのです」とありますが、なぜ筆者はこのように述べるのですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 多くの人々が、いろいろな角度から眺めたり、腰をかがめて顔を近づけて見たりと、誤った方法で鑑賞していたから。
- 2 どれほど芸術につうじた人でも、この作品のすばらしさを理解したうえで高額で買うことなどできまいと思つたから。
- 3 それ自体に美しさや歴史的価値などが存在しているわけではないものを、人々が強い関心を持つて見つけているから。
- 4 たとえどのようなものであってもデュシャン自身がサインすることで、大きな価値を生み出すことが証明されたから。

問4 ——線③「オリジナルとレプリカ」とありますが、文中の「オリジナル」や「レプリカ」に関して、デュシャンの考えを説明したものとしてふさわしいものを二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 オリジナルにサインをするさい、デュシャンが本名を用いなかったのは、この作品が評価されるか自信がなかったからである。
- 2 オリジナルの存在が分からなくなってしまったことで、レプリカであっても価値を持つことができる。デュシャンは考えた。
- 3 デュシャンは、オリジナルの《泉》が当時の人々にとって芸術としては受け入れがたいものであるということを予測していた。
- 4 デュシャンは、あえてオリジナルとは形状が異なるレプリカを認めることで、逆にオリジナルの価値を高めようと考えた。
- 5 美術商ジャンヌの手に入れたレプリカを使うことになったのは、それにオリジナル以上の価値をデュシャンが認めたからである。
- 6 デュシャンにとって、オリジナルかレプリカかということは問題ではなく、ただ美しさがなければよいとだけ考えていた。

問5 ——線④「それまでの『あたりまえ』からの解放の歴史」とありますが、ここでいう『あたりまえ』とはどのようなことだと考えられますか。次からふさわしいものを二つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1 象徴的 | 2 写実的 | 3 抽象的 | 4 幻想的 |
| 5 具体的 | 6 論理的 | | |

問6 空らん X、 Y に入るのにふさわしい言葉を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問7 本文には、「黒楽茶碗」という茶碗について述べた 内の文章がさらに続きます。この「黒楽茶碗」とデュシャンの「泉」とには共通点があると考えられますが、その説明として最もふさわしいものを後から一つ選び、番号で答えなさい。

従来の茶碗のように「見た目の美しさ」を楽しむことはできません。

《黒楽茶碗》を手にすると、ボコボコとした表面の凹凸とともに、手のひらに茶の温かさが感じられます。口に運ぶと、歪んだ飲み口が唇にあたり、そこからゆつくりと茶が口のなかに流れ込んできます。茶の温かさがじつくりと身体全体に染み込んでいくようです。

- 1 これまで重視されてきた視覚的な美しさをより高めることに成功したという点。
- 2 芸術作品の価値は見る人の考え方によって違いが生じるという点を示した点。
- 3 芸術を超越したところに芸術は生まれるということを実証してみせたという点。
- 4 従来顧みられなかった触覚や思考を活用したアートというものを意識させた点。
- 5 美しさは醜さとの対照によってこそ際立つ、という考え方に裏付けを与えた点。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

幼少時代を沼田は、当時、日本が植民地化していた満州の大連で送った。憶えている大連は、至るところにそこを日本より先に占領していたロシアの臭いが残っていた。日本には滅多にない煉瓦づくりの建物や住宅が並び、広場を中心に放射線状に道路がひろがり、北海道を除くと、あまり日本には見られぬアカシヤやポプラの街路樹が植えられ、そのなかで、成りあがり者の下品さと横暴さを持つた日本人たちが、前からここに住んでいた中国人を見くだして生活していた。中国人たちの住む地区は子供の沼田から見ても貧しく、みじめだった。父母に連れられて彼等の市場に行くと、ニンニクの独特な臭気がこもり、豚の首や毛をむしった鶏がぶらさがっていた。朝になると籠をかついだ中国人の女や少年が日本人の家に行商に来る。籠のなかには、悲鳴をあげて騒ぎまわる鶉が入っていたり、色彩の濃い瓜や西瓜がつまれている。そんな重いものを女や少年が天秤を肩に食いこませながら運んでいるのだ。それを日本人の主婦たちが当然のように値切りに値切ってやつと買ってやる。

沼田の母親はそんな中国人の少年の一人をボーイに雇った。大連では日本人は煙突のついた口シヤ風の住宅に住んで、家事、雑用仕事を手伝う中国人の子供を雇う時がある。その少年たちのことをボーイと言うのである。

沼田家に雇われたボーイは李という十五歳の少年で、^②かたことの日本語をしゃべり、不器用な手つきで母の台所仕事を手伝い、晩秋になると石炭をストーブにくべた。優しい性格で六歳年下の沼田が両親から叱責されると、懸命に庇つてくれたり、学校の帰りが遅くなると、沼田の身を ^①A じて途中まで迎えにきてくれた。【1】

学校からの帰り道、沼田は眼やにのいっぱい溜って泥だらけの捨て犬をひろった。毛は真黒で、舌まで紫色の満州犬だったが、あまりの汚さに母親は捨ててこいと命じた。「一日だけ」と沼田は半泣きになって哀願し、李に犬を洗ってもらうと藁を入れた木箱を台所の土間においた。

その夜、寂しさのあまり仔犬は悲鳴のような声をあげて鳴きつづけた。沼田が頭を撫でに台所に行くとき寝巻姿の父親が、

「やかましくて仕方がない」と怒った。「明日は捨てるんだぞ」

^③翌日、学校の授業中も沼田は仔犬のことばかり考えていた。授業が終ると沼田は家に走って戻った。庭で薪割りをしていた李が彼を見て、口に指をあて、ついてくるように合図をした。李に従って沼田は家の塀ぎわにある石炭小屋まで行った。黒光りする石炭の山の蔭に紐でつながれた仔犬が沼田を見て、小さな尾を懸命にふり、あたりかまわず尿を洩らした。

「これ、坊っちゃん、奥さんに言わない」

と李は狡さとやさしさのまじった微笑をうかべて沼田に教えた。

「坊っちゃんと李だけ知っている」

「わかった」

その日から石炭小屋は二人だけの秘密の場所となった。学校から戻ると沼田は缶に李の入れた残飯を犬の食事にそっと運んだ。名前はクロとつけたがやがてクロの眼やにが治り、一人で温和しく眠ることもわかった時、李はクロを庭に連れもどして沼田の母に言った。

「奥さん、あの犬、戻ってきた。もう鳴かないね、大丈夫」

母親は李の嘘に気づいたようだったが、沼田がしきりにせがむので、最後は **B** 負けして、飼うことを許した。【2】

半年ほどたって、李は解雇された。石炭小屋の南京錠が開けられて、石炭がいつの間にか半分も消えていたからである。日本人の巡査がきて、李の仕業だと疑った。李が石炭小屋のちかくで他の中国人の少年たちと相談していたのを見かけた人がいたというのである。

「とに角、奥さん、鍵を自由に使えるのは、あいつだけだからね」

と巡査は玄関のあがり口で大きな音をたてて茶をすすり、母親に説明した。

「あいつらを信用しちゃいけないよ。いくら温和しそうに見えたからと言って、あいつ等、何を企んでいるのか、わからん」

父親の詰問に李は首を振って否定した。沼田は障子のかげから父親の怒声や、それに弁解するしどろもどろの李の姿を盗み見して、息がつまりそうだった。

結局、李は沼田家を追いだされた。かわりになるボーイや阿媽（お手伝い）は大連のなかに、いくらでもいたからだ。

別れの日、李の持ちものは本当に小さな汚い包みだけだった。

「坊っちゃん、さよなら。坊っちゃん、さよなら」

と李は出ていく時、台所の戸をあけて沼田にくりかえした。「坊っちゃん、さよなら。坊っちゃん、さよなら」

その時の李の諦めたような微笑を沼田は長い歳月がたった今も思いだす。【3】

⑤ クロは大きく成長した。尾をちぎればかりに振った。仔犬時代とちがって、むっくりとした大人の満州犬に変わった。むっくりとしていてただけでなく、沼田が友だちと遊んでいる時、アカシヤの樹の下でむっつりとその遊びが終るまで待っていた。沼田の登校、下校の時も、背後をのろのろと従ってきた。沼田が、

「勉強は嫌いだ。学校なんかなくなるといい」などと話しかけると、クロは遠いものを見るような眼つきで彼の顔をじつと見あげた。【4】

小学校三年の秋、沼田の両親の仲が悪くなり、別れ話が持ちあがった。沼田には想像もしなかった突然の出来事だった。それまで彼は父親と母親と自分とが別々の世界に生きることなど考えたこともなかった。

夜、酒気をおびて戻った父は、応接間で母と長い間、言い争っていた。時々、父の怒声や母の泣く声がきこえ、その声を聞くまいとして、沼田は布団を頭にまで引きあげ、時には耳に指を入れて眠ろうとした。

その頃は学校から家に戻るのが辛かった。陽が落ち、少し寒くなった部屋に、あんなに明るかった母がひとり座って窓を見ながら、何か考えこんでいる姿を眼にせねばならなかったからだ。学校から家までの、さほど遠くない路のりを沼田は時間をかけて、のろのろと歩き、蜘蛛の巣に秋蟬の死骸が糸にからまれてぶらさがっているのを眺めたり、赤煉瓦の塀に白墨で落書きをしなから一分でも帰宅を遅らせようとした。辻では中国人の焼栗屋の呼び声がながれ、路ばたに客をまつ馬車のラバが、たかってくる蠅を尾と耳を動かしながら追っていた。彼がそんなものに気をとられている間、クロも立ちどまり、脚で首をかいたり、壁を嗅ぎまわったりして、主人を待っていた。

「帰りたくないよ」

沼田はクロにだけ話しかけた。わが家の事情を学校の先生や友だちに打ち明けられない彼には、鬱積した辛さを話せるのはクロだけだった。

「もうイヤだ。夜になるのがイヤだ。父さんと母さんの喧嘩の声をきくのがイヤだ」

クロはじつと沼田の顔を見て、当惑げに尾をかすかに振った。

（仕方ないですよ。生きるって、そんなもんですよ）

とクロはその時、答えた。大人になってから沼田は当時のことを思いだして、クロがたしかに少年だった彼に話をしてくれたと思っている。

「父さんは母さんと、別々に住むと言っているんだ。ぼく、どうしよう」

（仕方ないですよ）

「父さんと住めば、母さんに悪いし、母さんと住めば、父さんに悪い気がするけど」

（仕方ないですよ。生きるって、そんなもんですよ）

クロはあの頃の彼にとつて哀しみの理解者であり、話を聞いてくれるただ一つの生きものである、彼の同伴者でもあった。【5】

秋が終り、冬が過ぎ、大連にも五月、遅めの春がきた。そして母は彼を連れて日本に帰ることとなった。アカシヤの街路樹には、少女の耳飾りのような白い蕾が葉の間に垂れている。歩道で一台の馬車が、大連港に向う母と子とを待っていた。父は沈黙を守ったまま、奥の部屋に引こんで、彼等を送って出なかった。クロだけが尾で蛇を追っているラバの前をうろついていた。

沼田は馬車が動き出すと、ふりむいて、自分を追いかけてくるクロを見つめていた。泣くまいとしても目がぬれ、それを母に見られぬため顔をそむけた。クロは通りを曲つても、まだ駆けるのをやめない。まるでこれが沼田と自分との最後の別れだとわかったようだった。だがやがて、疲れたクロは足をとめ、去って行く沼田を諦めのこもった眼で見ながら少しずつ小さくなっていた。⑦ そのクロの眼も沼田は大人になっても忘れていない。彼が別離の意味を初めて知ったのは李とこの犬によってだった。

問1 本文では、沼田の少年時代の二つのエピソードがえがかれています。それに注目して本文を大きく二つの場面に分けた場合、一つめの場面はどこまでと考えられますか。もつともふさわしい場所を文中の【1】～【5】から一つ選び、番号で答えなさい。

問2 空らん

A

・

B

 に入ることばを次から一つずつ選び、漢字になおして答えなさい。

あん えん かん こん しん

問3 線①「成りあがり者の下品さと横暴さを持つた日本人たちが、前からここに住んでいた中国人を見くだして生活していた」とありますが、このような言動によく表れている部分が二か所あります。それぞれのどのような人たちによるものですか。文中のよび方で答えなさい。

問4 線②「かたことの日本語」とありますが、李が使う「かたことの日本語」の特徴としてふさわしいものを次から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「は」「が」などの助詞が使えていない。
- 2 「だけ」「もう」などの語の用法が正しくない。
- 3 「です」「ます」などのていねい語が使えていない。
- 4 「これ」「あの」などの指示語の使い方が正しくない。
- 5 「坊っちゃん」「奥さん」などのよび方がふさわしくない。

問5 線③「授業が終ると沼田は家に走って戻った」とありますが、この時の沼田の気持ち
を説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 仔犬をかくまうという李との計画がうまくいったか気がかりだったから。
- 2 母親にふたたび捨てられた仔犬の生存を少しでも早く確認かくにんしたかったから。
- 3 自分が学校に行っている間に仔犬がどうなったのか心配でならなかったから。
- 4 どうすれば仔犬を家においてもらうことができるのか李と相談したかったから。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

春がきて

凍こおっていた顔もとけてきた

チュールリップのように並なんだ笑え顔が

世界には

まだまだいっぱい素す晴はらしいことがある

と

①それは

教えてくれているようで

②よかつたね

生きていて

まだ風は冷たいけれど

春の服を着て

出かけてみよう

蛇じやぐち口は胸の中にある

ひねれば

きつと

昨日とは違ちがう水が出る

(高階杞一の詩より)

問1 この詩の題名として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 水すずむ

2 水ぬるむ

3 水かれる

4 水こおる

問2 この詩の中で、使われていない表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 直ちやく喩ゆ

2 隠いん喩ゆ

3 対たい句く

4 倒とう置ち

問3 ——線①「それ」が指しているものとして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 世界中にあるすばらしいこと
- 2 春が間近にせまっていること
- 3 人々の表情が明るくなること
- 4 色とりどりに花々が咲くこと

問4 ——線②「よかったね／生きていて」とありますが、これについて説明したものととして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 これまで知らなかった素晴らしさを知ることができるのは、生きているからこそであるという、生きている人々に向けられた思いやりの言葉。
- 2 これまで知らなかった素晴らしさを知ることができるのは、生きていることの証であるという、生きることに悩む人々に向けられた戒めの言葉。
- 3 これまで知らなかったことを知るといのは、生きていくうえでの知識や経験不足を意味しているという、若い人々に向けられた教訓的な言葉。
- 4 これまで知らなかったことを知るといのが、生きていくということの意味であるという、不完全な自分自身に向けられたいたわりの言葉。

問5 ——線③「違う水が出る」とありますが、ここでの「水」がたとえているものとしてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 記憶
- 2 思い
- 3 考え
- 4 希望

4 次の各問いに答えなさい。

問1 説明にふさわしい表現になるように、①～④の□をすべて漢字でうめなさい。ただし、

①～④のいずれにも必ず漢数字が一つ入るものとします。

① 相手の力量に敬意を表して、自分が一步へりくだって接すること。

↓ □□置く

② 早起きをするの良いことがあるということ。

↓ 早起きは□□の徳

③ 前後の矛盾むじんしたことを言うこと。うそをつくこと。

↓ □□舌

④ どの方面にも障害があつて、手の打ちようがないこと。

↓ □□ふさがり

問2 次の[A]～[F]に漢数字を入れると四字熟語ができますが、その数の合計はいくつになりますか。ふさわしいものを後の1～4から一つ選びなさい。

[A] 石 [B] 鳥

[C] 転 [D] 転

[E] 者 [F] 様

1 || 12

2 || 13

3 || 14

4 || 18

